活動報告書

報告者氏名：原　伸生　　所属：長野県稲荷山養護学校　　記録日：　２０１３年　２月１４日

【対象児（群）の情報】

・学年　高等部総合コース３年

・障害名　広汎性発達障害

・障害と困難の内容

音声言語表出は 1~2 語文程度であり、確認や要求で使われることが多く、「～しない」と否定文で表現されることが多い。また、相手の言ったことに対してエコラリアで応えることが多い。

大きな声や音があったとき、それらから逃れるために声を出している友達や教師の腕をつねったり噛んだりしてしまう。

次の活動に移ることに時間がかかる。

【活動目的】

・当初のねらい

不快な声や音がした時に、適切な言語表出をしたり適切な行動をとったりすることによって友達や職員に働きかけ対処することができる。

手がかりを頼りにして、活動に見通しを持ち、次の活動に自発的に移る場面が増える。

・実施期間

6 月から翌年の２月（現在）までの８ヶ月間。

・実施者

高等部総合コース３年３組担任　原　伸生

・実施者と対象児の関係

学級担任

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

大きな声や音を出す児童生徒に対する「つねる」「かむ」の他害行為が、週に１～２回の頻度で起きていた。他害行為の対象になる人は特定の生徒が最も回数が多かった（6 回）。また、関わっている職員に対して「つねる」こともあった。

他害行為が起きる場面は作業学習の時間が最も多く、課題別学習、移動場面、校内実習、朝の運動等、様々な場面にわたっていた。

また、次の活動に移ることに時間がかかり、活動に遅れることが頻繁にあった。

「つねる」「かむ」の行動がどのような働き（機能）があるのかを知るために、行動観察や MAS（動機付けアセスメントを行った。その結果、逃避（「やた」「逃れたい」）と要求（「何とかして」）の機能があることが推測された。

以上のことから、「つねる」「かむ」の不適応行動は、それらをすることによって不快な声や音がなくなったり、逃れたりすることができるという誤学習をしてきた結果だと考えられた。

・活動の具体的内容

そこで、iPad に表示される画面（図１）を見たり操作したりすることによって、自らの行動の手がかりとし、適切な言動をしやすいようにすること、またその結果、職員や友達から称賛などの肯定的な関わりが多く得られるようになることを支援の仮説として考えた。

図１

支援０期（～５月）　iPad 導入前のベースライン期

支援１期（６月～７月）

Keynote のやくそく画面、適切なセリフ画面、スケジュール画面を見たり操作したりして活動に参加した。称賛とシールによるトークンエコノミーで評価（「やったね！カード」）を得た。

支援２期（８月～１０月）

セリフ画面、スケジュール画面のみとし、シンボルシールによるトークンエコノミーを実施（「やったね！カード」）。

支援３期（１１月）

トークンエコノミーを終了し、代わりに自らシンボル画像を Keynote 画面に貼り付けることによる自己評価に切り替えた。

支援４期（１１月下旬から現在）

スケジュール画面の編集作成を本人が行うようにした。また、評価は職員による声がけやジェスチャー（OK サイン）のみとした。

その他

Safari を使って画像や動画を見て余暇を過ごすことを選択肢の一つにした。

・対象児（群）の事後の変化

支援１期

作業学習の時間の「つねり」「かみつき」が怒らなくなった。その代わり不快な声や音がすると、職員に対して「つねらない」「かまない」という言語表出を頻繁に行うようになった。

しかし、その他の活動場面では週に１回程度、「つねる」「かむ」行動が見られた。

支援２期

職員が適切な言動をシンボルシールで評価すると、シンボルシールをじっと見つめ、その後も繰り返し、シンボルシールの内容に該当する適切な言動をするようになった。シンボルシールの内容は「つねらない、かまないでがまんした」「つねらないでおまわりさんこない」「まるであかちゃんのよう」「うるさい」「しずかにしてください」「たすけて」「〈握手、タッチ、すりすり〉」「きゅうけいしたい」「たいじょうぶ」「できました」などであり、次第に増えていった。

この時期になると学校生活全般にわたって「つねる」「かむ」行動は見られなくなった。

支援３期

卒業を控え、担任による直接的な支援（担任が側にいることが前提となる支援）ではなく、本人が iPad を便利なツールとして使いこなしていくために、一定の効果があったトークンエコノミーを終了し、シンボル画像を Keynote 内にある「やったね！カード」に貼り付けることによって自分の適切な行動を自己評価できるようにした。

その結果、校内実習や現場実習においても、全ての活動に不適切行動をすることなく参加する

ことができた。

支援４期

登校した際に、その日のスケジュール画面を本人が編集するように支援した。コピー、ペースト、スライドの並べ替え、画像の置き換えの操作を覚え、自発的に黒板の日課表を見ながら、スケジュールを作るようになった。

この時期でも、支援２期の適切な言動を自発的に行い、「つねる」「かむ」の不適切行動はほぼ見られなかった。

また、校外学習（写真１）や現場実習へも同様の支援方法で参加することができた。

写真１

その他

支援３期のことらか、次の活動への移動がスムーズになってきた。

Safari からインターネットを検索し、好みの画像や動画を見て余暇をすごすことを楽しみにしている。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

Keynote 画面の様々な視覚的手がかりによって、ストレス場面や活動の切り替えの場面で、適切言動がしやすくなったということに加え、私たち担任も本人への関わり方に変化が生じたことが大きな要因の一つであったと感じた。以前は「つねる」「かみつく」ことが起きた後に、「そういうことはしません」などと注意を促すことが多かったが、支援後は、うまく対処できたときに注目して称賛を中心とした関わりが多くなった。

本人の表情も以前は不安げだったり緊張した面持ちであったりすることが多かったように感じられたが、最近はとても安心した表情になり穏やかになったという印象を受けている。

・エビデンス（具体的数値など）

図２に、支援期ごとの「つねる」「かむ」回数の変化を示した。

支援の工夫をする度に、他害行為が減っていったことが分かった。

また、不適切行動の減少という変化と同時に、その裏では、適切な言動が多くなり、iPad を本人が使って環境の変化に適切に対処している姿が増えていったことを付け加えておきたい。

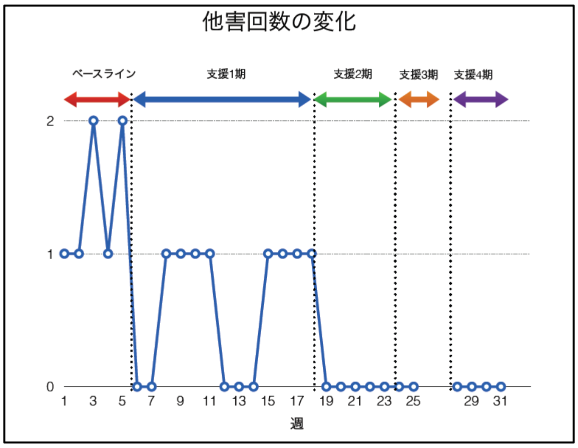

図２

・その他エピソード（画像などを含めて）

以上の支援にあたっては、支援会議を通して関係者への報告をしたり、支援の要請をお願いしたりしてきた。そのような場合、iPad という具体的なツールとその活用方法は、抽象的な支援方法より、関係者にもとても伝えやすいものであった。また、支援の記録を丁寧にとることによって、支援の効果を説得力のある方法で伝えることができた。その結果、家庭や現場実習での活用につながり、卒業後も使っていかれるツールとして支援をつなぐことができたと考えている。